説教20220821イザヤ28：14-22ルカ13：22-30「嘲りではなく憐みを」

　私たち人間は、はかなく弱く、貧しく寄る辺ない存在です。どんなに多くのものを所有し、権力がある高い地位についたとしても、それが解消されるわけではありません。又、この地上のどんな国であれ、永遠に繫栄し、世界のリーダーであり続けるということは出来ないということを歴史は語っています。

　でも、人にしろ国にしろ、絶好調の時には、そんな風には考えられず、傲慢になって、主の御言葉を忘れ、主をおそれることも忘れ、まさに今日のイザヤ書に書いてあるようなセリフを口にするようになるでしょう。15節、「我々は死と契約を結び、と協定している。洪水がみなぎり溢れても、我々には及ばない。我々は欺きを避け所とし、偽りを隠れがとする。」

これは一種の万能感ですが、このように語る人も、永遠の命に至る一種の「救い」を追い求めているのでしょう。そこには、自分の力を過信した、自力救済の姿が満ちています。イエス様は私には必要ありません、私は自力で死やヨミをどうにかし、たとえノアの時のような洪水が来ても、私たちには及ばないような仕掛けを作りましょう、というわけです。何か現代の科学者が口走りそうなセリフにも聞こえますが、彼らには、「欺き」ですとか「偽り」と言った罪の意識は欠けているのです。だからこそ事態は深刻だ、ともいえるのですが。

　自力で救われようとする時に、特徴的に表れるのが、恐怖や嘲りです。19節「洪水は溢れる度にお前たちを捕らえる。それは朝ごとに溢れ、昼も夜も溢れる。この御告げを説き明かせば／ただ恐怖でしかない。」

私たち人間は、はかなく弱く、貧しく寄る辺ない存在であるがゆえに、分不相応な自力での救済を追い求めても、その道行きは、洪水に次ぐ洪水で、恐怖が絶えることがないのです。そしてその恐怖のゆえに、同胞の中でより弱く、貧しい人たちをあざけるということをしてしまうのです。

　このような恐怖や嘲りが、救いの道だなどとは、誰にも思えないことでしょう。しかし、そのことが今、絶好調の人には分からないし、気づくことが出来ないのです。

　イエス様は、この様な、いわば偽りの救いの道に入ることを、狭い戸口以外の戸口から入る道であるといわれているようです。狭い戸口でない戸口は、広くて名前が付いたみんなが注目する立派な戸口であることでしょう。今、絶好調の人は決して狭い戸口ではなくて、この様な立派な戸口を間違いなく選んでしまうのです。

　主なる神は言われます、22節「今、嘲ることをやめなければ／お前たちの縄目は厳しくなる。わたしは定められた滅びについて聞いた。それは万軍の主なる神から出て国全体に及ぶ。」

知らず知らずのうちに、立派な門から入り、恐怖と嘲りの内に、歩みを進めている人たちは、自覚がないまま、何かに縛られ、滅びへと向かっていきます。それは個人的なレベルにとどまらず国全体の滅びへとつながっていく、

　何とも恐ろしい話ですが、現代に生きる私たちにも決して身に覚えのない話ではなく、何か現実に差し迫った話のようにも聞こえてきます。

私たちは、はかなく弱く、貧しく寄る辺ない存在ですので、国をどうしようとか画策しても、どうしようもありませんので、今出来ることを、主の御言葉に従って、忠実に行って参りたいと願います。それは「今、嘲ることをやめ」るということです。これは、主をおそれ主の前にへりくだるならば、意外に簡単に行うことが出来るでしょう。

今、あざけることを止める。是非、この御言葉に聞き従って参りたいと願います。

箴言17章 5節より

貧しい人をる者は造り主をみくびる者。

貧しい人を嘲る者の道は深まっていってしまいます。是非、一刻も早く方向転換をしなくてはなりません。

　方向転換、即ち罪を悔い改めた人の道が16節に記されています。

それゆえ、主なる神はこう言われる。「わたしは一つの石をシオンに据える。これは試みを経た石／堅く据えられた礎の、貴い隅の石だ。信ずる者は慌てることはない。

信ずる者は慌てることはない。。わかり易くてよい御言葉であります。何を信ずるかと言いますと、シオンに据えられた一つの石、即ちイエス様です。イエス様を信ずる者は慌てることはない。それは、洪水がみなぎり、溢れる時にも、イエス様ご自身が、その人の避けどころ、避難所となって下さるからです。ですからその人には恐怖も嘲りもないのです。

この様にイエス様を信じる道も又、深まっていきます。恐怖ではなく恵みが、嘲りではなく憐みがその人には、積み重なって与えられます。この道は実に幸いな道なのです。

　でも人はなぜ、恵みではなく恐怖を、憐みではなく嘲りを選んでしまうのでしょうか。敢えて、こんな風に問いかけられれば、純粋に不思議、というほかはありません。そしてその理由も、簡単であります。それはその人がイエス様から離れてしまったからです。イエス様から離れてしまいますと私たちは恐怖と嘲りに支配されるほかはないのです。

イエス御自身も、私たちに、私から離れるなと言われています。

マタイによる福音書/ 26章 38節

そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」

しかし、このようにゲッセマネの園でイエス様から、私と共にいるように言われた弟子たちも数日後には、十字架の恐怖に怯えて、イエス様から離れてしまうのですが。

又イエス様は次の様にも言われました。

マタイによる福音書/ 28章 20節より

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

つまり、私たちは、常に、そして最後まで、イエス様と共にいるならば、イエス様によって救われるのです。

はかなく弱く、貧しく寄る辺ない私たちが歩まされるイエス様の道は、恵みと憐れみの道です。その道を歩むには「狭い戸口から入るように努めなさい。」とイエス様は言われます。

この狭い門は、先述しましたような、広くて名前が付いたみんなが注目する立派な戸口では無くて、名もなく、みすぼらしくて、腰をかがめなければ入り切れないような狭さなのかも知れません。ひょっとしたら、この狭い門は私たちが自ら選んで入るのではないのかも知れません。ただ、イエス様に憐れみを求めて、イエス様の御言葉に聞き従ったものが、それぞれの狭い門を恵みとして与えられるのでしょう。

さてこの狭い門の先にはどのような道が続いているのでしょうか。それは一言でいえばイエス様と共に歩む道でありますが、今日のルカ福音書では、その有様が、宴会の場面で喩えられています。

そもそも、聖書には様々な、飲んだり食べたりする宴会の席が描かれていまして、イエス様ご自身もよく宴会をしていたということです。

そして宴会には良い宴会と悪い宴会とがあるということが描かれています。

ルカ福音書/ 12章 19節

こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』

こういった宴会をイエス様は憎まれます。その、一方で、

ルカ福音書/ 05章 33節より

「ヨハネの弟子たちは度々断食し、祈りをし、ファリサイ派の弟子たちも同じようにしています。しかし、あなたの弟子たちは飲んだり食べたりしています。」と人々から揶揄された時のイエス様が開催した宴会は、イエス様には、よしとされているのです。

この様に、どういうのがよい宴会で、どういうのが悪い宴会かということの見分けは、人間の目から見ればなかなか難しいところもありますが、イエス様の眼から見ればそれは一目瞭然なのです。

私たち人間の目から見ても分かるような良い宴会とは、飲んだり食べたりしている時に、みんなが憐れみあっている、そして反対に悪い宴会とは、みんながりあっているということではないでしょうか。

今日のルカ福音書では、神の国での宴会という最も良い、最も祝福された喜びの宴会が喩えられていますが、先ず、そこに入れない人々の姿が記されています。彼らは主人に言います。『御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです』しかし、主人は彼らに言います。『お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ』

彼らは、不幸にも、最後の最後に神の国の宴会の戸口の前に立って、神の国の宴会が、それまで自分たちが行ってきた宴会と全く違うのだということを歴然と知らされたのでした。これを人間的にわかり易くたとえれば、それまで、人をることで憂さ晴らしをし気焔を吐くような宴会ばかりして来た人が、まことに主の憐れみを受けながら憐れみ合うような宴会の席にはなじめないばかりか、同席することも難しい、ということになるでしょう。

一方で、神の国の宴会に入れる人は、アブラハム、イサク、ヤコブや全ての預言者たちと同席し、又、東から西から、また南から北からという様にこの地のいたるところからやって来る人たちと同席し、又、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者がある場合もあるけれども、時間の流れも超えて、古今の集まって来るひとたちと同席する、という将に大宴会に入れられるということなのです。そしてその神の国の宴会の雰囲気は、主イエスを中心として主の憐れみを受けながらみんなが憐れみ合うというような雰囲気でありましょう。

まあ、こればかりは、未だ誰一人参加したことがない神の国の宴会ですので、ここでも一つのたとえとして表現するしかないのです。

狭い戸口から入り、主イエスと共にその道を歩んだ人の終着点は、このような神の国の宴会に喩えることが出来ます。そこに至るまでには、その道を歩む私たちは多くの試練にあわされることも又聖書には記されておりますけれども、その試練に遭っている最中でも次の御言葉は、主の憐れみと慰めになるかと思いますのでご紹介します。

箴言/ 15章 15節

貧しい人の一生は災いが多いが／心が朗らかなら、常に宴会にひとしい。

この様に、主イエスの御言葉を、常に心で味わいかみしめながら、私たちがイエス様の道を歩んでいくとき、その一歩一歩は、常に神の国の宴会に臨むような祝福された良き歩みとなることでしょう。

祈ります

天の父

主よ、はかなく弱く、貧しく寄る辺ない私たちを憐み、慰めて下さい。

私たちの高ぶる心をしずめ、あなたに委ねる道を全ての人に備えて下さい。

殊に、今、各国の政治の指導者たちが、まことの支配者であるあなたに従い、行動していくことが出来ますようお導き下さい。全ての恐れとあざけりから解放し、あなたの憐れみの内に育てられ、人々を憐れむ道へと導き返して下さい。

今を、生きる私たちが、まことに大切な御言葉を常に心に留め、、偽りの言葉、欺きの言葉から私たちを遠ざけて下さい。

御子イエスが指し示す狭き門は、小さくみすぼらしい入口かも知れませんが、私たちが御言葉によって常に、狭き門を選ぶことが出来るようにしてください。あなたの御心である、憐れまれ憐れむ生活を私たちが行っていくことが出来ますように。

父と聖霊と共に一体